

③ 開拓使顧問「ホラシケブロン」報文は、黒田開拓使次官により

明治四年米國より招聘され、教師頭取顧問 (Commissioner and Adviser) として、數多の同國技師を指揮して開拓に努力した米人ホラシケブロン (Horace Capron) が、其の在任中 (1871—1875) に或は報文の形に於て、或は開拓使主腦者宛書狀の形式に於て自己の開拓に關する意見を發表せる物、及び彼のプロジェクトに屬せる外國技師達の報文をも合せて、其の滿期歸朝の際、一括して開拓使當局に屬して一冊の報文集として校刊せしめ

た、是即ち (Report and Official Letters to the Kinkaiushi by Horace Capron, Commissioner and Adviser, and his Foreign Assistants.) であつて全部歐文である。之を外事課で翻譯せるもので、總言教師頭取兼顧問「ホラシケブロン」書信。博士「ウキアム・ビブレキ」報文摘要以下五十餘に分れた物を收めて居る。尙本書は、最初は歐文の物をも併せ採録する考への所頁數の都合上割愛したとの事である。

尙本卷には、次の如き諸種の計畫、或は建議、具申書等が收められて居るが此處では單に名前を擧ぐるに止むる。即ち「西郷開拓長官建議」(明治十五年一月)、「北海道三縣巡視復命書」(明治十八年)、「岩村長官施政方針演說書」(明治二十年五月)、「北垣長官北海道開拓意見具申書」(明治二十六年三月)、「北海道十年計畫の大要」(明治三十二年—三十三年五月)、第一期北海道拓殖事業計畫說明書 (明治四十二年歟)、第二期北海道拓殖計畫說明書 (昭和元年歟) 及び北海道國有未開地大地積貸下貸付表。以上が第六卷收録のものである、是により明治初年より昭和の今日迄の北海道

拓殖の主要なる物を殆んど網羅せるもの、やうである。以上 (既刊三冊、菊判、第一卷、二七七頁、圖版五十、第五卷一、五四六頁、圖版十五、第六卷一、〇六四頁、圖版三、非賣、北海道廳編) (田中)

### 東洋歴史大辭典 第一卷

、平凡社發行 四六倍大判 五三〇頁

明治中期以來我が國に勃興した東洋史學の研究は、爾來着々として進歩發展の一路を辿つて來たが、友邦滿洲國建國後はその進展の勢益々著しく、專攻者の數は愈々多きを加へ、その研究は益々廣く研究の成果より見るも遙かに他の諸國のそれを凌駕するに至つたことは實に慶賀に堪へない次第である。東洋史學界の隆盛に拍車をかけた滿洲帝國の出現は、又我が國人をして東洋に於ける我が國の地位を認識せしむるとともに、東亞一般に對する注意を深からしめ、東洋の歴史を知つてその現勢を理解せんとの慾求は澎湃として我が讀書人の間に起つて來た。今や東洋の歴史はひとり専門史家の研究の對象であるばかりではなく、廣く一般知識人の關心の繫る所となつてゐるのである。然るに東洋史に關しては、從來適當なる入門書がなかつた爲めに甚だとりつきが惡く、また專攻者にしても字句の難解の爲めに昏迷挫折することも一再ではなく、正確にして幽密なる内容を有する指導書の出現を望むこと切なるものがあつた。今向平凡社より出刊せられた東洋歴史大辭典は實にかゝる期望に副ふべく編纂せられたものである。

本辭典は矢野、濱田、池内三博士、橋本慶大教授監修の下に、斯界の權威老大家を始め、少壯氣鋭の學徒自餘氏の執筆にかゝり今回發行のものは全八卷の内その第一卷で、以下隔月に一卷宛發行せらるるといふ。今第一卷をみると「アーカノ」までを収録してゐるが、支那にはア行を以て始まる言辭少き爲め、滿蒙、インド中東等に關する項目が多い。解説は簡潔平易を旨とし、典據を示し参考文献を挙げ、一讀して現在に於ける研究の結果を知らしめ各項目ごとに執筆者名を署して記述の責任を明らかにしてゐる。以下通覽して心づきし點を要記して以て本辭典の紹介としよう。

第一に項目の採擇に關しては、實際上如何なる標準によつて採擇せられたかは知らないが、紳士録、地名辭典ならばいざ知らず、歴史辭典としてはさほど必要とも思はれざる人、地名が往々見うけられるに反し、清朝時代北京に在つて支那事情の調査に従事し、支那書の翻譯をなし、間接にはロシアの對清外交に貢獻したといはれる宣教師イヤギンフ、グルーベと並び稱せられる東洋語學者イワノフスキー、カストレン等重要と思はるゝ項目を設けてゐない。これは私の知見の範圍に於て氣づきしことなれば、他にも重要なものにて採録せられざりしものが、相當にあるのではあるまいかとの懸念を抱かしめられるが、これは本辭典の權威の爲めに尤も遺憾とする所である。

個々の項目に就いていへば、  
 ウンナイシユエー 雲内州(二三八頁)。雲内州の位置に關してはたゞ蒙古遊牧記の比定に従つてあるが、和田清氏の考定(史林一六ノ二、豐州天德軍の位置について)を擧げて置くべきではなからうか。

らうか。

ウツチキョー(ウツチケイトク) 尉遲恭(尉遲敬德)(二一六一—一七頁)。兩唐書の列傳によつて極めて要領よくその事蹟を記してゐる。しかし後世この敬德は河北山西から遼東遼西にかけて、寺廟の建造家として民間信仰の對象となつてゐるのであるが(村田治郎博士「建築家となつた尉遲敬德の傳説」ドルメン滿鮮特輯號所載)、かゝる方面に關しても言及しておいてはしかつたと思ふ。

エンオーラン 鴛鴦潭。Yuan-yang-tan(二一九頁)。これはエンオーレキ(鴛鴦)の誤である。解説中の昂吉澤も昂吉澤と改むべきである。又「金軍の宗翰、宗杲」とあるが、宗杲は日本の誤である。

カイヤクゴ 華夷譯語(四四四頁)。解説全體が恰も韃靼館譯語に關するもの、如くであり、讀者をして誤解を起さしむるおそれがある。又明火源潔、馬沙亦黑等の撰せし譯語の解説中、我が東洋文庫にも一本ありとの説明を附してゐるが、他の二種の譯語に關しても夫々その所在を明らかにしておいてはしかつた。

カトンジョー 可敦城(五二三頁)。松井等氏の考説のみによつて記述し、羽田亨(史林一ノ二、西遼建國の始末及び其年紀)箭内互(韃靼考附錄可敦城考、蒙古史研究所載)兩博士の考定には言及せず、又参考文献にも之を擧げてゐないのは如何であらうか。

そのほかイニカン委任官(二二二頁)の項に於て、この制度が現今滿洲帝國に於て採用せられてゐることを言はず、オルデンベルク(三八九頁)の項に於て西域探險に關する記述を全く缺い

てゐるのが目についた。又挿入の色刷地圖一葉は貧弱である。今少しく精密なるものを望むのは私人だけではないであらう。

本辭典が今後號を逐うて編纂せらるべきものなるを思ひ、以上心づきしまゝを記して参考に供した次第であるが、項目の採擇に缺くる所あるは別として、その他の諸點は本辭典の價値を損するものではなく、全體としての出来榮えは甚だよい。私は敢て之を専門史家並びに一般讀書人にとつての好伴侶として推奨するものであるが、執筆者各位は本辭典の利用者の層の廣きを考へ、解説にはなるべく主觀的な記述を避け、參考文獻を出来るだけ多く挙げてほしいと思ふ。本辭典の出現によつて、我が東洋史學研究が更に進展の歩を進め、一般讀書人の東洋に關する知識の愈々深まらんことを祈つてやまない。(外山軍治)

### 昭和十年度東洋史研究文獻類目

水野清一、森鹿三修、増村宏、大島利一纂

本書は一昨年刊行された東方文化學院京都研究所「昭和九年度東洋史研究文獻類目」に引續いて、昭和十年刊行の日本、支那、歐米の諸雜誌、論集に收められた東洋史に關する論文を類別裁録した目録である。採録の範圍は同研究所々載のものに限つてゐるのであるが、日本發行のものでは雜誌七十四種、論集十種、支那は雜誌五十五種、論集一種、西洋は雜誌三十一種、論集二種の多きに及んで居り、東洋史關係の目ぼしい雜誌は略々網羅されてゐると云つて宜い。

此等諸雜誌に收められた論文が、日本支那の部及び歐米の部に一般史、歴史地理、社會史、經濟史、政治史、法制史、宗教史、學術思想史、附教育、科學史、文學史、附音樂、美術史、考古學、金石・古文字學、民族學、言語文字學、書誌學、叢書彙纂、辭典・類書、學界消息の十九門に分け、各門を更に子目に分つて裁録されてあり、二十目の分け方は日本支那の部と歐米の部とは違つてゐる。又批評紹介は歐米の部では論文と並べ記して批評者の名を括弧に入れて之を區別し、日本支那の部では附録として一括されてゐる。其の他に著者索引が夫々に附けられてゐる。

以上が本書の體裁の大概であるが、四千に近い論文を大した破綻もなく分類裁録し、更に各論文の頁數までを記して其の論文の内容を想見せしむる様注意を拂つた編者等の勞を我々は先づ多としなければならぬ。又、近時本書以外に大塚史學會高師部會編「改訂增補東洋史論文要目」、于式玉編「日本期刊三十八種中東方學論文引得」、劉修業編「國學論文索引」、歴史學研究會編「歴史學年報」、經濟史研究所編「經濟史年鑑」、其他「史潮」、「史學研究」附録の文獻目録等種々の目録が世に送られてゐるのであるが此等の中にあつて本書が如何なる特色を有するかを以下述べよう。

第一に本書には一冊の内に日本だけでなく支那や歐米のものまでが同一分類の下に收められてゐる事である。今日の東洋史學界に在つては支那、歐米の學者の業績を無視する事の不可なるは論を俟たない。本書の前年度版に於ては日本之部と支那之部とが別けられてゐたのであるが、今度はその區別が廢されて日・支の論